要 旨
Memoria de un recorrido en Yucatán

Es un ensayo de mi viaje a Yucatán en el mes de agosto de 2002, que tuvo por objeto de reconocer el área sobre varios aspectos de la arqueología e historia.

Uno de los problemas sobre la cultura yucateca que siempre me interesó ha sido sobre qué base económica se sustentaron las grandes y maravillosas ciudades prehispánicas, así como las de estilo Puuc, Chichen Itzá, Mayapán, etc. Para pensar en este problema, hice una lista de los productos de Yucatán como la sal, miel, henequén, algodón, pedernal, etc., ya que no se puede contar con gran excedente de productos agrícolas en esta tierra, porque como dice Landa: Yucatán es una tierra la de menos tierra que yo he visto, porque toda ella es una viva laja, . . . (Landa, 1973, p. 117).

Entre los productos mencionados, siempre he pensado que la sal era el producto más indicado para contestar mi duda; después de recorrer las salinas en la costa norte de Yucatán, quedó más reforzada la idea que tenía antes. La miel también es conocida por la buena calidad y la producción generalizada en la península de Yucatán, ya que los cronistas la mencionan y arqueológicamente es comprobable. De cualquier forma sobre todos los productos mencionados aquí y otros no mencionados o ignorados faltaría investigar más.

Otro de los problemas era netamente histórico-arqueológico, por ejemplo el problema de que sí hubo o no la influencia directa de Teotihuacan; al ver los edificios con talud y tablero en Oxkintoc y Dzibilchaltun que dicen que es estilo teotihuacano, no me pareció que era así, sino más bien está relacionado con la arquitectura del Petén guatemalteco, aparte de esto se han encontrado bastante material arqueológico en la costa norte yucateca del tipo Tzakol pero sin los elementos teotihuacanos, por lo que pienso que no hubo influencia directa de Teotihuacan. Los problemas de la cultura maya-tolteca han sido siempre muy complicados, aunque por las limitaciones de este espacio no las mencionaré aquí, solamente diré que pude ver nuevos datos al respecto pero todavía no están ordenados y me servirán para futuras investigaciones.

Durante este recorrido obtuve muchos conocimientos e ideas que me dejaron muchas tareas.

キーワード：ユカタン，塩，考古学，養蜂，ノノワルカ
2002年夏、ユカタンは暑かった。
長い間あたためてきたメソアメリカ踏査計画の第一歩をその暑いユカタンで踏み出した。と言っ
tても、総合的な計画を立てたわけではない。テーマは設定したが、漠然とこれまでに訪れたことの
ない土地を歩くことを目標とした程度であった。過去に調査した地域も、遺跡に張り付いて発掘
調査をしているとどうしても踏査する余裕がなくなってしまう。特に日本から出かけていて調
査する場合は、限られた時間内でできるだけの発掘資料を収集することも重視するため、な
おさら踏査の余裕はうまれない。つまり欲求不満に陥っていたのである。

ユカタンを選んだ理由はいろいろある。メキシコ高原文化とユカタン・マヤ文化の関係をユカ
タンの地で考えてみたいという理由が、多分最も大きい。かつて、1970年代前半にメキシコ州
テオテナンゴ遺跡の調査をしてきたとき、メンバーの一人であった言語学者オットー・シューマ
ン氏から受けた質問が頭から消えることはなかった。それは「メキシコ高原のオトミ語とユカタ
ンのマヤ語の間に単語の貸借関係があるか、どう思うか、二つの集団の間にいつそれほどの関係
があったのか」というものであった。その時何も答えられなかったし、その後かなりわかってき
たというもののは今もわからないことが多い。そのときから、オトミ人の歴史文化と二つの
地域の関係はどのようなものであったかを考え続けてきた。しかし、ユカタン・マヤ文化につい
てはあまり追究してこなかった。今回ユカタンを踏査しようと決めた背景には、そうした長年抱
えてきた懸念があり、その解決には、何よりもその土地を歩くことが不可欠だと考えていった。

ユカタン州は、1970～80年代に、隣接するキングナ・ロー州やカンベチェ州での発掘調査や
踏査の移動経路にあるという理由で、チェン・イツァやウシュマルなどの主要な遺跡を訪れた
程度であった。当時からユカタン半島北部のマヤ文化に関係して現場を見つつ考える必要がある
と思いつつ放置してきた問題は多い。それらは以下の4点に絞られる。

(1) ユカタン半島北部のような農耕に適した土地が少ない地方に、なぜチェン・イツァやウ
シュマルをはじめとする多数の華麗な建築をもった遺跡が残されたのか。その経済的基盤は
何だったのか。

(2) ユカタンにテオティワカンの影響はあったのか。

(3) チェン・イツァ（遺跡）のマヤ・トルテカ文化の起源と性格。

(4) ユカタンにおけるチチメカ文化とチェン・イツァおよびマヤバンとの関係。

こうした問題を解決するには、考古学だけでなく、文献史料の研究、民族学や言語学に関わる
知見、地質学や土壤学などの自然科学分野の知識など多角的な視点から見っていく必要がある。と
くに考古学と文献史料については、マヤ地域の中のユカタン・マヤ文化という狭い範囲を対象に
していては、大きな歴史的事件の真相に近付くことはむずかしい。少なくともマヤ地域全体やメ
キシコ高原地域との関係を問題にしなければならない。

以上、踏査を実施する上での大枠を考えたが、細かく調査報告書などを下調べをしたわけでは
ない。最初の踏査はいつもことだが、いわば白紙の状態で臨み、踏査をしながら印象に残ったこと、思いついたこと、誤解していたこと、考えていたことと合致したこと、思いもかけなかったこと、等々を整理し、調べ確認すべきこと、問題外で排除できること、より集中的に調査しなければならないこと、などを抽出した上で次の踏査計画を立てることが方法をとった。この一文はユカタン踏査における見聞の整理途中のメモであって、今後の研究の指針とするためのものである。

【ユカタンを歩く】

ユカタン州の州都メリダの空港には、かつて1970年代中半のテオテナンゴ・プロジェクトに国立人類学大学の学生として参加したリカルド・ベラスケス氏を迎えに来た。20年余りの再会であった。髪も髭も白く、熱帯の太陽にさらされた肌は羊皮紙のように、どこから見てもフィールドで活動し続けた考古学者の風貌だ。彼が今回の踏査の指揮役である。なんと言ってしまっても20数年間ユカタンで考古学調査を行ってきた実績がある。空港の建物を出るとアットという間に汗が噴き出した。この時から一ヶ月続く暑いユカタンの踏査が始まった。

メキシコ各地で発掘調査をしていた頃（1969年〜80年）、私同様にフィールドで活動していたが、当時若手の研究者たちのいく人かがユカタンやキンタナ・ローにいることを知った。考古学に関しては、ベラスケス氏とともに彼らの協力を得ることができ、以下に記す遺跡の踏査ができました。

オシュキントク（Oxkintoc）遺跡・マヤバン（Mayapán）遺跡・アカンケ（Acanceh）遺跡・アケ（Ake）遺跡・イサマル（Izamal）遺跡・ジビルチャルトゥン（Dzibilchaltún）遺跡・ウシュマル（Uxmal）遺跡・カバール（Kabah）遺跡・シュラバク（Xlapak）遺跡・ラブナ（Labná）遺跡・ロルトゥン（Loltún）遺跡・チェンイツァ（Chichen Itzá）遺跡・エクバラム（Ekbalam）遺跡・チャクムルトゥン（Chacmultún）遺跡（以上、ユカタン州）・エルメコ（El Meco）遺跡・エルレイ（El Rey）遺跡（以上、キンタナ・ロー州）。

先スペイン期の遺跡以外では、ユカタン北海岸一帯に広がる製塩地、エネケン農園、文献史料に記される村々などを訪れた。

1. マヤの古道サクベ

ユカタンでは、まず第一に「マヤ古道 — サクベ — の研究」における現地踏査を軸として歩きつつさまざまな問題を考えていく計画であった。

「マヤ古道の研究」の共同研究者である駒井二郎氏（元資源・環境観測解析センター）が行う人工衛星画像の解析からの遺跡発見の試みに対する考古学的研究が私の分担である。マヤ地域、とくに低地マヤ地方の衛星画像から遺跡発見の可能性を追究してみると、その過程で、画像の中の直線に注目した。直線は多くの場合道であり、道だとすれば直線の両端には都市などの集住地
の遺跡があるはずであると考えた。ユカタン半島北部には、長さ100kmに及ぶヤシュナ（Yaxuná）遺跡とコバ（Cobá）遺跡を結ぶサクベの遺構が古くから知られている他、イサマル遺跡・アケ遺跡間32kmを結ぶサクベが大規模なものとして知られている。また、多くの遺跡の内部にも大小のサクベが見つかっている。

ところで、ユカタン半島北部には自然の通路の役割を持つ河川がない。ユカタン半島北部は平坦な石灰岩の地盤が広がっているため、雨水は地中に吸収されてしまって河川が形成されること

---
は稀である。それに加えて、密林は中低木の樹木と茨の多い下草が密生した密林とサバンナが一般的な風景であり、道がなければ移動は非常に困難である。

ユカタンマヤ史の中で重要な役割を果たしたイツァ集団に関わる記述に「……イツァたちは、（チャカンプトゥンを発ってチチェン・イツァへ向かうが道に迷い）……木々の下を、イバラの敷の下を、生い茂るつる草の下を苦しみつつ移動した……」（El Libro de los Libros de Chilam Balam, 1985, pp. 38–39）とあるように、ユカタンの密林は歩くことさえむずかしい自然環境の下にある。ユカタンの人々はその環境に対処する方法としてサクベを建設した。サクベは、堤状に石を積み上げ路面は漆喰で舗装してあった。舗装しなければ植物の繁茂によってすぐに役に立たなくなる。たとえばチチェン・イツァ遺跡内のサクベの表面をよく観察すれば、わずかながら残っている舗装面を見出すことができるであろう。

今回、駒井氏の衛星画像の解析資料をもとに何処所か確認のための踏査を行った。第一に幹線道路のひとつであった、イサマルーニカ間のサクベの一部を歩いた。現在のイサマルの町から西へ約21kmの地点は一部発掘され修復されてあったが、雑草が生い茂っていて正確な数字は得られなかった。それによって、幅は約12.20m、高さは路肩部で70cm内外、断面の形はカマボコ形であった。このサクベが機能していた頃の状態なら十分自動車が走れるほどの立派な道路であっただろう。

次に、ウシュマル遺跡と他の遺跡の間にあると考えられるサクベの踏査を行った。ウシュマル遺跡とその東南約18kmにあるカバー遺跡の間のサクベは、カバー側で幅約4m、高さはせいぜい20～30cmしかない。これは人工衛星画像ではほとんど見分けができないであろうし、航空写真でも検出はむずかしいと思われる。

後述するオシュキント遺跡はウシュマル遺跡の西北約30kmの地点にあるが、これら二つの遺跡を結ぶサクベがあることは十分考えられるが、雨季の植物の繁茂に妨げられ緑密な踏査はできなかった。また、踏査ではサクベの発見はむずかしいのではないか、人手を入れてサクベがあると推測できる部分を広く伐採した上で試掘していく方が有効だと考えた。特にオシュキント遺跡の場合、発掘・修復された遺跡内のサクベは、高さが20cmもなく、未発掘の状態で地表面の観察によって発見することは非常にむずかしいと感じた。

ともあれ、今回はじめて衛星画像に基づいてサクベの踏査をして、広域を対象にするよりも、遺跡を選んで集中的に調査することが重要だと感じた。

ところでマヤ古道を調査の対象とする場合には、決して道の遺構を探すことだけが目的ではない。道、といっても必ずしも陸上の道だけではなく水上の道も含むが、人の営みをあらゆる角度から考えさせる力を持っている。人それぞれが何かの目的を持って道を往き来した。道はそうした個々人の思感を包括して直接道の目的や性格が求められていく。まして、自然発生的な道ではなく人工的に計画されて造られた道には、支配者たちの思感が込められている。その点を常に念頭において踏査を進めた。
2. ユカタン・マヤ文化的経済的基盤

ユカタンの石灰岩がゴロゴロころがっている風景と壮大で華麗な遺跡群を見るといつも大きな満足感を感じる。いったいどれだけの建造物群を建造するだけの経済力はどこから得られたのか、と。ユカタンを横断しながら車から景色を見るだけでも農耕に適した土地が非常に少ないことに気付く。つまり農耕による大きな余剰生産物が、あれば建築を生み出した経済的基盤とは考えにくいのである。

この問題を今回の踏査で解決できたとはとうてい言えない。ますます疑問は深まるばかりだが、見たこと聞いたことを整理してみた。

[エネケン]

メキシコ州からメキシコ湾を横切り、フラミンゴで知られるユカタン州西海岸のセレストゥン上空を飛んでメリダに近づいた時、空から整然と区画整理されていたから何らういち棄てられなかったような場所に見えた。放置されたエネケン（henequén）畑である。

エネケンとは竜舌草の一種で、その繊維は丈夫でロープや袋などの良材である。それはサイザル麻とも呼ばれた。ユカタン北海岸のシサル（Sisal）港から船積みされたことからその名が付いた。エネケン産業の盛期は19世紀末から20世紀初頭にかけてであった。ユカタンは風景が一変するほど広い範囲でエネケンが栽培された。最盛期である1880年から1915年の間には千近くのエネケン農園を数えたという（Quezada, 2001, p. 165）。勿論そこには少数の支配者である白人と収奪されるマヤ人など、多くの社会問題が表面化した。やがて、第一次世界大戦の終了とともに需要が減って斜陽化していき、豪華な農園は徐々に放棄されていた。

農園の全てがエネケンブームにのって新設されたものでなく、それ以前から存在した農園がエネケン産業に転じた例も少なくない存在した。そうした農園主の建物は「……英国製もしくは中国製の磁器を取り揃えた食堂、お仕着せを着たマヤ人の使用人たち、複雑で金のかかった流水システムを備えたイタリア大理石製の浴室・トイレ、電話、蒸気風呂や室内プール……」などあった。また農園は「……管理人の家、礼拝堂、病院、牢屋、日用食料雑貨店、学校、倉庫群、果樹園、飲料水用の井戸や貯水池、エネケンの繊維を取り出す工場」から成っていて、「その周辺に労働者たちの家々が建てられていた」という（Ibid., pp. 165-166）。まさにエネケン小王国の都である（写真1）。

エネケン王国の栄華と虚しさを感じさせる、いまは廃墟と化したこうした農園のいくつかを訪れた。たとえばアケ遺跡やジェピルチャルトゥン遺跡などのように農園の廃墟が同居している情景を見ていて、あるいは先スペイン期にも、エネケンのような何かに大きな需要が生じた時期があり、それによって得られた財力が華麗な建築文化を誕生させたのかもしれない、などと想像をたくましくした。しかし、エネケン産業の寿命の短さからも考えられるように、その何かが氷き起こした熱も冷め栄華の時代は終わった、と想像が想像を生んだ。とはいえものの、その何かが何
写真1 グラナダ農園の廃墟（上）とホテルとして再生したサンタ・ロサ農園のプール（下）
大井 邦明

であるのかは想像の外にある。

余談をもうひとつ。メキシコのアルコール飲料といえばテキーラだが、テキーラは主としてハリスコ州などメキシコ北部が生産地で、竜舌蘭の一種からつくられる蒸留酒である。ところが一時期テキーラ用の竜舌蘭が不足し、ユカタンのエネケが使われたと噂されている。真偽のほどは確かめようがないが、竜舌蘭なら繊維の他に蜜水を採ることができるのであるようか。テキーラはスペイン征服後のものだが、先スペイン期のものとしては竜舌蘭の蜜水を採取して発酵させたブルケ酒がよく知られていて、現在でも飲まれている。問題はマヤ地域のアルコール性飲料で、ブルケ酒が飲まれていたとは植民地時代の文献にも書かれていないようである。マヤ地域ではトウモロコシからつくられるチチャとユカタンではバルチェとよばれる飲み物がある。

メキシコ高原では神によって造られたとされるブルケ酒がなぜマヤ地域には普及しなかったのであろうか。少なくともエネケは先スペイン期から栽培されていたことは、例えばエル・カルパドルのホヤ・デ・セレ恩遺跡で民家の裏庭に植えられていたことからも確かである。繊維を採るだけだったのであろうか。この点も疑問が残ったままであった。

さらに余談を付け加える。先スペイン期の遺跡と競合するように各地に残る農園の廃墟のいくつかは、近年ホテルとして再生している。あるメキシコの銀行家が廃墟を買い上げ、組織した建築家も修復の専門家のチームが忠実に農園建築を修復してホテルにしている。そのひとつ、ホテルになったサンタ・ロサ農園を見学したが、冷暖房機器などは設置せず、なかなかい雰囲気であった（写真1）。

【塩】

16世紀のユカタン司教ディエゴ・デ・ランダは、ユカタンの塩について次のように記している。

「……ユカタンには……70レグアを超える距離にわたってその全てが塩田である湿地帯がある。それはエカブの海岸のイスラ・デ・ムヘレスの近くからはじまり、海岸に接して……カンペチェ近くまで続いている。（湿地は）薄く……しかし村々と海岸を往復するのは、生えている木々と泥ばかりのため困難である。この湿地＝塩田の塩はそこに神が創造したもので、私がこれまで見たなかで最も良の塩だ。なぜなら粉状になった塩はたいへん白くて、塩のことをよく知る人に言われれば非常に良い塩だという。ここの塩、半セレミン（1セレミン＝約4.625リットル。または537平方m）が他の塩の1セレミンに相当する。キリストがつくる塩は、雨水による湿地でつくられるのであって海水からではない。海水は入ってこない。なぜなら海と湿地帯の間に陸地（洲）がずっとつながっていて海から隔てられている。雨季には湿地帯は水で満ち、その水の中で塩が氷砂糖に似た大小の塊に凝固する。4、5か月のち雨季が終わって、湿地の水がある程度干上がると、インディオたちは昔から塩を採集・収穫する習慣である。その習慣は、氷の中から塩の塊をとりだし、水気を取り除く。こうした採集には湿地の場所・地点が決められていた。そうした場所はより豊富に塩があり、泥や水が少ない場所で、首長たちの許可なしには塩の
収穫はしなかった。そうした許可は塩田から近いところの首長の権限下で行われた。そして採取者たちは首長たちに労働奉仕するか、塩そのもの、あるいは土地の産物で支払った。それを最終的に管理したのはカウケル¹のフランシスコ・エワンであった。（それ以前の）マヤパノ体制の時は海岸に監督者を配置し、塩の分配を管理した。（今は）グルタリラ聴訴院が塩の収穫を管理する役人を派遣している。収穫の時期には多量の収穫があり、メキシコ、ホンジュラス、ハバナに運ばれた……」（Landa, 1973, pp. 120–121）。

かつてこの文章を読んだとき、ユカタンの塩は潮の満ち干と天日によって自然につくられる塩だと理解した。カリフリュニア半島の太平洋岸にあるグレロ・ネグロでは自然がつくりだす塩の結晶の層が数十キロメートルもの長さにわたって広がっていて、収穫にはそこに船を停泊させ重機とベルトコンベアを使って積み込むだけという。それと同様だと思い込んだのである。

ところが実際にユカタン北海岸を歩いてみて、どうやら誤解していたことに気付いた。

ランダがいうように、海岸線に沿った細長い陸地の内側に海岸線と平行して湿地帯があり、そこで製塩が行われている。

最初に訪れた場所は北海岸の東端のラス・コロラーダスで、そこでは大規模製塩を行っていた。塩場の塩塩は区画された広大な塩田が連なっている。収穫には重機が使われ、巨大な塩の山ができている。そして遠浅の海に張り出した大型の橋梁に設けられたコンペアで塩を橋梁の端に停泊する船まで運ぶシステムである。塩田のひととつは、縁辺部に塩ができており、まだ水が残っているところはピンクがかった赤色を呈している。なぜそうなるかはわからない。雨季の所為か人の姿がなく教えてもらうことができなかった（写真 2）。

北海岸中央部のズィラム（Dzilam）付近では、道路に沿って小規模な塩田を見ることができる。
写真 3 伝統的塩田（上）と塩の収穫（下）
伝統的な塩田なら雨季の収穫はないだろうと思っていたが、塩田の縁に小さな円錐形の塩の山がいくつも並び（写真3）、近くの倉庫から塩の袋をトラックに積む作業をしている人たちを見て、作業中ではあったいくつか質問をしてみた。トラックに積んだ塩は塩田から収穫したものでカンカンのホテルに搬入すること、ホテルではそのまま使うそうである。塩田で採取した塩は精製の必要もないきれいなものだという。実際そうした塩田の塩を少しもらい使っているがおいしい塩である。製塩法については、作業中の中でもあり質問はいくつかしたもののが出来なかった。とくに、塩田に取り込む水は井戸から得ていることという話がさらに疑問を増やした。

日本の揚げ氷式塩田の場合、海水から塩水をつくりそれを煮詰めて塩をつくるのだが、ユカタンの製塩はそれとは異なった天日製塩法が使われていることまでは何となくわかった。しかしこの方法の詳細はわからないままである。ランダもおそらく実際にこの製塩法を理解して書いたのではなさそう、彼の記述からその方法を知ることはできない。ユカタンの製塩については米人による詳細な調査研究はすでにがあるので、それを参考にしつつもう一度現地踏査をしてみたい。

ところで、塩が人の生存に不可欠であり、塩のもつさまざまな性質から宗教的にも特別な意味が与えられる。経済的には古く多くの国家が専売してきたこと、また戦略物資として統制されることなども念頭においてユカタンの膨大な塩生産を見る必要がある。特にランダの、古くはマヤが塩の生産や売買を統制していたことと植民地時代にはゲッチャマラ聴訴院がその役割をもっていたとする記述から、ユカタンの塩の重要性は明らかである。

塩がユカタンのマヤ文化を育てた、最も重要な経済的基盤であったことは間違いないであろう。しかし、問題は塩をめぐってどのような経済活動があったのか、政治的にどのように利用されたのか等、特に考古学的に解明する方法を見つけることが求められる。例えば、塩の荷包法や運搬法を特定できれば、どのルートを通ってどこへ運ばれていたかもわかるであろう。また塩がどのように表現されるかを図像学的に確かめれば、塩に関する情報が豊かになるであろう。

ともあれ塩はユカタンのマヤ文化を理解する鍵であると言えよう。

【ユカタンの農耕と産物】

ランダは「ユカタンは、これまで私が見たなかで最も土が少ない土地で、至る所に岩（石灰岩）が露頭している」（Landa, op. cit., p. 117）と述べている。このような土地での食糧生産はやはり限界があったと思われる。それは人口に反映している。20世紀のそれも異なった年のデータではあるが、メキシコのユカタン州・カンペチェ州・キンタナ・ロー州に広がるユカタン・マヤ語を母語とするマヤ人の人口は20世紀半ばで約30万人（Swadesh, 1960, p. 153）だが、マヤ南部地方でもゲッチャマラだけに限ってもマヤ人口は約400万人を数える（外務省編『中南米諸国便覧』1993年度版）。このマヤ北部と南部の人口の違いは、農業生産力の違いとしても良いと考えている。

ユカタン州西部のマシュカヌ（Maxcanu）村にはオシュレクト遺跡があるが、この遺跡はブウクと呼ばれる地方の東北端にある。ブウク建築の名で知られるブウクはマヤ語で「低い丘陵」
大井邦明

を意味し、マシュカヌ村に始まり、ほぼ東南方向に低い山並みが連なっている。このブク地方
にウシュマル遺跡をはじめとする数々の華麗な建造物を持った遺跡が集中しているのである。そ
してブク丘陵の北側には平坦な土地が海岸まで広がっていて、そこにチチェン・イツァやマヤ
バンなどの遺跡がある。

ブク地方は、ユカタンの中では例外的に肥沃な土地が見出せるという。その点をオシュキン
トク遺跡で働くマシュカヌ村の農民の一人に聞いてみた。

マシュカヌ村の近くに面積700haの非常に肥沃な土地があり、農業専門家による農業試験の結
果は驚異的であった。その土地は分配され彼も土地を分配された一人であった。しかし短期間で
その土地の耕作はやめてしまい、畑は放置していたまで、彼のようにやめた人は少なくない。耕作
をやめた理由は、植えた作物の成長はすばらしいが、同時に雑草の繁茂がはなはだしくその対応
ができなくなったからというものであった。

この話、単純に話すと悪者が片づけてしまうには一寸違うように思え、更にいろいろなテー
マで雑談を続けた。彼は、毎年家族が一年間食べていくだけのトウモロコシの収穫があり、そ
れが誇りだと言った。そこから、私の想像は一気に古典期のブク諸都市の放棄の問題に跳んだ。
都市活動が続いているということは支配者の統治が順調であり、肥沃な土地は余すところ無く耕
され、民はせせと働いて生産をあげていた。ところが一旦、何らかの原因で支配体制が崩壊し
たとき、農民はもはや高い生産をあげる必要がなくなり、農地の多くを棄ててしまった。だから
新しいチチェン・イツァの時代（後古典期）には、ブク地方に都市活動が復活することはなかっ
た。少なくとも、チチェン・イツァの新しい支配者はブク地方の農業生産力を重視していなかっ
たようにみえる。

ユカタン半島の主要産物について『カルキニ文書』に述べられる貢納品リストが参考になる。
そこには、トウモロコシ、七面鳥、ハチミツ、綿がユカタンの征服者モンテホに差し出されたと
記されている（Códice de Calkini, 1957, p. 43）。

棉と綿布の生産がかなりのものであったことは、ランダも述べている（Landa, op. cit. p. 216）。

ユカタン半島のハチミツは品質の高さ——品質の基準が何であるのか不明だが——で知られている
という。針がない土着の蜜蜂（Melipona beecheii）による養蜂は、先スペイン期に起源をも
ち、征服後ヨーロッパ産の蜜蜂がもちこまれたが、ユカタンでは20世紀初頭まで伝統的な養蜂
が続けられた（Echazarreta González, C. et al., 2002, p. 49）。ハチミツは古来甘味料として用いら
れるとともに、さまざまな病気に薬効があり薬として使われてきた。またハチミツとともに採取
される蜜蝿も利用された。

先スペイン期の養蜂については、遺跡から出土する直径10-15cmの石の円盤が養蜂に使われ
たものだとされる。キカンナ・ロー州の海岸、プラヤ・デル・カルメンからシナレットの間の調
査で、養蜂の遺構が数カ所で発見されている（Terrones, 1994）。その一つは、長さ約10m、幅
約1.5m、高さ1mの石垣で囲まれた長方形の遺構が発掘され、その内部から多数の石の円盤
が出土したことから、調査したテロネスはこれを養蜂の遺構だとし、この石組みは丸木で作った

—110—
果箱を置く台であったと推定している。

テロネス氏はその遺構をキントナ・ロー州の伝統的養蜂の民俗誌的調査報告と比較している。
「……果箱は、長さ約50cm、直径約20cmで、ヤシュニク（Yaxnic）と呼ばれる木を割り抜き両端を木の円盤と泥で蓋をつけたものである。丸木の中央には穴が開けられ蜜蜂の出入り口となっている。
……（丸木の）果箱からのハチミツの採取は年3回、11月から5月の間に行われる。蓋をはずし採蜜する場所の付着を注意深く棒を使って開き、他の果箱には触れないようにする。ハチミツはエネケンの纖維で編んだ網を通して容器に集められる。……採蜜作業が終わったら再び蓋をする……」（Villa Rojas, 1945）（図2）。

こうした民俗事例を参考にして、テロネス氏は発掘された養蜂の遺構は、長軸に対して直角に丸木の果箱が配置されていたものと想定している。また、ランダをはじめとする16世紀の記録者の多くが、ユカタン半島の養蜂に言及している。いずれも養蜂が盛んに行われていたこと、採蜜量が多いこと、品質がすぐれていたこと、蜜蝋は琥珀のような黒っぽい色をしており、果箱は丸木を割り抜いて両端に蓋をしていることが述べられている（Landa, op. cit.; Oviedo y Valdés, 1851–55; Mediz Bolio, 1973など）。

ユカタン半島のハチミツ生産がすべて同地方の需要に応えるためだけであったならば、スペイン人の記録から見て考えにくい。メキシコ全体で生産されるハチミツは、例えば、1980年に58,000トン、1986年は75,000トンを記録し、そのうち58,000トンが輸出された。90年代には滅

図2  ユカタン半島の伝統的養蜂の図（Terrones, 1994より）
大八 邦明

少傾向にあり、1998年の輸出量は生産量の14％の26,321トンであった。因みに、現在ユカタン
半島で生産されるハチミツはメキシコ全体の30～35％に及んでいる（Echazarrete, et al. pp.50–
51）。こうした統計がそのまま先スペイン期のユカタン半岛におけるハチミツ生産の実態を表わ
しているとは思わないが、依然としてユカタン半岛ではハチミツ生産が盛んであることを示して
みた。ユカタンハチミツの輸出のデータは入手できなかったものの、ある養蜂家の話では輸出用
に生産しているケースが多いということであった。

ハチミツは塩とは別の意味でユカタンのマヤ文化を考える上で重要な産物である。塩の場合も
高品質で味が良いものを求める風潮はいつの時代にもある。例えば、メキシコ州の温泉地イスタ
バン・デ・ラ・サルでは少なくともテオティワカン時代から製塩が行われていた。私の聞き取り
調査によれば、20世紀前半にはその塩をもって産物を買い取ることができ、おいしい塩だというこ
とで彼の製塩地の塩より手作りの塩が高かったという。高品質で美味であることから大きな需
要が生まれることは、どこでも同じであり、特に安定した時代にはその傾向は強かったであろう。
ハチミツの場合も同じであろうが、塩よりも必需品としてのランクは低いことから、安定した社
会を背景とした場合の需要が大きかったのではなかろうか。

このような前提に立ったとき、やはり物流の道が重要になるのである。

3. 先スペイン期のユカタン・マヤ史に関するメモ

ユカタン踏察の主な目的は遺跡を歩くことであったが、すでに述べてきたように古いマヤ文化
の伝統の多くは今日に伝わっており、遺跡だけでなく古代世界を理解することは困難である。勿論
それはメソアメリカ全般に言えることではある。

ユカタンの古代マヤ文化については、先述したように、メキシコ高原文化との関わりのなかで
考えていくことを基本的姿勢として踏査したが、言うまでもなくユカタンのマヤ的なものを見た
いうわけではない。

まず一般に使われるユカタンの考古学的編年のかで今回の目的に関連した時代を見ておく。
以下、批判は多いもののなじみのある名称を使う。年代も問題を含んでいるが一般に受け入れら
れているものを記しておく。

古典期前期（200年～600年）／ブウク期（古典期前期：600年～1000年）／マヤ・トルテカ期
（後古典期前期：1000年～1200年）／マヤハン期（後古典期後期：1200年～1450年）に分けら
れる。

[ユカタンとテオティワカン——オシュキントク遺跡で——]

オシュキントクはペラスケス氏が長年調査と修復保存を担当している遺跡である。宿舎は近く
のマシュカヌ村の中心部の古い家で、近くにはマヤ語辞典の編纂やマヤ研究に欠かすことができ
ない『チラムバラムの書』などの史料のスペイン語訳と研究で大きな成果を挙げた故アルフレド・

—112—
バレラ・パスケス（Alfredo Barrera Vásquez）教授の生家がある。この宿舎を基地に、連日40度を大きく超す猛暑と雨季の植物の繁茂のなかで踏査を開始した。

オシュキントク遺跡はプウ地方の東北端にあることはすでに述べた。

現時点でユカタン最古の年代記録はオシュキントク遺跡で見つかっている。それは、1号まくさ石（入口上部の石）の浮彫りで、そこには紀元475年に相当するマヤ長期暦の年代が記されている。因みにこの遺跡で最も新しい年代記録は、紀元849年に相当する年代である。

遺跡の踏査による観察データとこれまでの発掘調査の成果の詳細を記す余裕はないが、オシュキントクの重要点をいくつか記してみる。遺跡は低い丘陵が広がる広い範囲にピラミッド神殿、宮殿、広場等を組み合わせた建造物複合体が散在し、建造物複合体間はサクベ（幅約3m、2.30m、1.10mの3種類）によって結ばれている。ただし外へ向かうサクベはまだ確認されていない。先述のようにオシュキントクの東南、直線距離約30kmの地点にはウシュマル遺跡があるが、両者を結ぶサクベは衛星画像からも見出せることができない。ひとつには、オシュキントク遺跡で発掘されたサクベを見ると、高さ20cmほどの石を並べて造られており、発掘され修復されていればサクベだとわかるが、未発掘の状態では地上での地表面の観察でも確認することが非常に困難である。それ故、衛星画像からの検出は更に難しいと考えられる。しかし、ウシュマルへ向かうサクベが存在した可能性は大きく、将来の綿密な踏査と発掘調査が待たれる。

オシュキントク遺跡に見る建築様式と構造の変遷は興味深い。まず、8種類の異なったマヤ式アーチが時代ともに変化していたことが挙げられる。マヤ式アーチは要石を持たないため擬似アーチと呼ばれる。この工法で広い室内空間を求めようとすれば常に強度の問題にぶつかったであろう。素人の目から見ても、マヤの建築家は強度と美の両方を得ようとするさまざまな工夫をこらしたことが見て取れる。

今回の踏査でどうしても確認したかった「ユカタンへのテオティワカンの影響」に関わる建築様式についてである。オシュキントク遺跡の古い段階の建造物には、一見してテオティワカンの建築様式の最大の特徴であるタール・タブレロ壁10に似た壁型が使われている（写真4）。写真で見ただけでは、テオティワカンの影響が及んだ証拠だと誤って理解しかねない。しかし、よく見るとちょっと違うことに気付いた。イメージから言えば、テオティワカン的というよりティカル的なのである。どういったことかと言えば、マヤ中部低地の大都市遺跡ティカルには、その勃興の段階から建造様式や形影のモチーフ、そして土器型式などに非常に強いテオティワカンの影響の跡を残している。そこで創り上げられたテオティワカン的要素を色濃くもった新しいマヤの建築・美術様式はマヤ低地一帯に普及していく。オシュキントクのテオティワカン的と見た建築は、実はティカルだったというのは、上の状況からである。

この仮説を確めるには、発掘遺物を見る必要があった。マシュカヌの宿舎に収蔵されている遺物の山を調べてみたが、テオティワカン文化の遺物はまったく見出すことができなかった。ベラスケス氏の話では、わずかに、カンデレロ（「ろうそく立て」の意）と呼ばれるテオティワカン遺物が一点のみつかっているだけだという。正直な感想として、これには意外な感じがした。
このあと、メリダ市にある、国立人類学研究所ユカタンセンターの遺物修復室と博物館（Palacio Cantón）の地下収蔵庫でユカタン各地の遺跡から送られてくる遺物を見た。そこで見た範囲ではテオティワカン文化の遺物は見出せなかった。ときに、最近古典期前期の遺物が大量に出土したとされるユカタン北海岸のズィラム（Dzilam）遺跡の遺物も見た。マヤ中部低地のツァコル式土器ではあるものの、中部低地では一般的な三脚付円筒形土器が含まれていなかった。三脚付円筒形土器はテオティワカン起源であると同時に、いわばテオティワカン進出のシンボルとして位置づけられる土器型式である。ユカタン地方のこの土器がほとんどみつからない事実をどのように解釈できるのか、もっと情報を集める必要を感じた。

もう少しこの問題を考えると、マヤ南部においては、カミナルフユ遺跡に見るようにタルー・タプレロ壁はテオティワカンの形態に非常に似ているだけでなく、土器もさまざまな形のテオティワカン式土器が見つかっている。つまり、テオティワカン文化がそのまま持ち込まれたように見える。これがマヤ中部低地のティカル遺跡になると、土器の型式やテオティワカンの主神トラロックのモチーフ、タルー・タプレロ壁などテオティワカン的要素をベースにしてしながらもマヤの美術に見られる細密さ優雅さによってアレンジされ、マヤ特有の建築・美術が創造される。マヤの外を見ると、例えば、メキシコ西部ミチョアカンのサンタ・マリア遺跡ではテオティワカン文化そのもののといえる建築・美術が見られる。オアハカ地方の大中心モンテ・アルバン遺跡には、テオティワカン文化の要素は明確に見られるものの、土着の建築・美術の特徴のなかに組み込まれたかたちで表現される。ティカルの場合とよく似ているのである。

こうした違いは、テオティワカンの地方支配の違いを意味しているのではないか、と解釈している。つまり、直接的な支配と間接的な支配である。間接的な支配とは、たとえば同盟という名の下の支配や地方経営の拠点を委託した支配である。
このように、考えていくとユカタンにはテオティワカンの直接支配は及ばず、オシュキントク遺跡にみるタルー・タブレロ壁はマヤ中部低地のティカルなどから伝わったマヤ化されたテオティワカン的要素であると考えられるのである。

もう一点気になったことは、メソアメリカの遺跡のどこでも表面採集できる黒曜石がユカタンでは極端に少ないのである。メソアメリカでは、天然ガラスである黒曜石は刃物の材料として必需品といっても言い過ぎではないほど重要な産物であった。テオティワカンは黒曜石を戦略物資として重視し独占化を図った、と考えている。またマヤ南部は黒曜石の重要な産地がいくつかあり、カミナルフョ遺跡には黒曜石で壁面を飾った建造物さえある。それがユカタンで一般的ではなかったということは、テオティワカンとの直接的な交流がほとんどなかったことを示していると考えられるし、マヤ南部さえ直接的なつながりが乏しかったのかもしれない。

別の視点からこの問題を見ることもできる。ユカタンでは黒曜石に代わる刃物の材料にはユカタン半島の各地で産する坩埚が使われた。坩埚の産地は周辺にもつメキシコ高原において坩埚は、260日から数年建築中の内の日の名称で、四つの「年の担い手」という象徴的な価値が与えられる。なぜ黒曜石ではなく坩埚なのか、いずれ解かねばならない問題の一つとしてファイルしておく。

タルー・タブレロ壁についても記しておく必要がある。確かにこの壁の形はテオティワカンの影響度を見る上で重要な要素である。しかし、ある遺跡でテオティワカン遺跡のタルー・タブレロ壁と形や構造が同じだからといって短絡的にテオティワカンの影響があったとは言えない。その典型的な事例として、アステカ王国の都テノチティランの建造物にタルー・タブレロ壁が使われていることを挙げることができる。アステカの王たちはテオティワカンと諦め戦争を繰り返し伝承は語っている。巨大都市テオティワカンを築き上げその偉大さに少しでも近づこうとしたタルー・タブレロ壁を採用したこととはその願望の一端を示しているとすることでできる。テオティワカンの滅亡から700年もの後においても、テオティワカンは強い影響力を持っていたことを前提にすれば、その滅亡直後からずっと影響を与え続けたと考えられる。そうした遺跡は少なくない。

メキシコ西部ミチョアカン州のティンガニオ（Tinganio）遺跡では、球技場にもタルー・タブレロ壁が使われているが、テオティワカン滅亡後の古典期後期の遺跡である。その北側のハリスコ州のイステベテ（Iztepete）遺跡の建造物もタルー・タブレロ壁が使われているが、同様に古典期後期に位置づけられる。ユカタンの場合でも、チチェン・イツァ遺跡のマヤ・トルテカ期の建造物にはタルー・タブレロ壁がかなりの頻度で使われている。これらもテオティワカン滅亡より大分のちのことである。こうした事例を並べた上でタルー・タブレロ壁という建築上の特徴を見ていくことが必要である。

なお、ユカタンの古典期前期におけるタルー・タブレロ壁の使用例は、オシュキントク遺跡の他にジピルチャルトゥン遺跡でも見つかっている。また、今回訪れることはできなかったが、『ナショナルジオグラフィック』誌2002年4月号で、プブク丘陵にあるチャク遺跡にテオティ
ワカンの影響がみられると紹介されたが、上の理由で軽々に結論づけることはできないことは明らかである。

[プワクの美とプワク文化の終焉]

オシュキトク遺跡ではタルー・タブレロ壁の建造物の後、プウク様式の建造物が建設される。プウク様式とは、第一に建造物壁面の装飾に特色がある。ウシュマル遺跡の諸建造物にその典型が見られる。それはファサード（建物正面）の上半分に小切石を組み合わせて幾何学文や形式化されたチャク神その他の装飾が施され、下半分は装飾なしの単純な切石の壁から成っている。しかしこの諸遺跡を訪れると遺跡毎に装飾壁の工夫が見られ、当時の建築家たちが美を競った状況を想像することができる。例えば、円柱の入口、円筒形の小柱列装飾、各階層が部屋列から成

写真5 ラブナ遺跡の「門」

図3 「蛇の口から出現する神」の像。左から、それぞれウシュマル遺跡、チチェン・イツァ遺跡、ヤシュチラン遺跡の彫刻。
「宮殿型」ピラミッド神殿、サクベと関係するアーチ型の「門」（写真5）等々、プウク建築の要素を列挙することはむさびしい。

建築美を誇ったプウク文化も元1000年頃には活動をやめてしまう。ひとつの時代の終焉である。一時の終わりの原因を見るときはます次の時代を見ることが常道である。それはチェン・イツァに誕生するいわゆる「マヤ・トルテカ文化」で、ここではこの名称の是非は論じる余裕はないが、羽毛の蛇神に象徴される文化である。その美術は蛇のモチーフを満載させることを使命とするかのように、壁画に彫刻に蛇が表現される。

しかし、蛇をモチーフにした美術はプウク文化期にすでに現れている。例えば、ウシュマル遺跡の魔法使いのピラミッドの壁に嵌め込まれていた彫刻は、蛇の口から出現する神を表現している（図3）。同じモチーフの彫刻はオシュキントク遺跡でもみつかっている（写真6）が、古典期後期の多くのマヤ遺跡、例えばコパン、ヤシュチランなどの中部低地の遺跡、南部地域でも少なくない数の同様の石彫が見つかっている。ウシュマル遺跡では、華麗なプウク建築の壁面装飾に蛇が付け加えられる。「矩形の尼僧院」の装飾壁面には羽毛の蛇の彫刻が割り込んでいる。

さらに今回気になったのが、カバー遺跡の宮殿コズ・ポープ（Codz-Poop）の浮彫である。そこには蛇は見えないが、アトラトル（atlatl）をもった人物や眼鏡状の装身具を付けた人物が戦っている場面が表現されている（写真7）。一連のマヤ文字が伴っているものの古典期マヤ美術の雰囲気ではない。加えて同建造物上部の装飾帯に等身大の丸彫りの人物像が嵌め込まれている（写真8）。これも異文化の雰囲気をもっている。

どうやら、マヤ中部低地の古典期後期（600-900）にすでにメソアメリカの新しい流れである「蛇神」が入っていたと考えられる。中部低地では、バシオン川流域のセイバル（Seibal）遺跡の彫刻に見られる蛇のモチーフの繰り返しや異常な絵文字（ヒンバル遺跡1号石碑にも）が
写真 7 カバー遺跡の非マヤ的人物の浮彫り
写真 8 カバー遺跡の非マヤ的人物像

刻まれる。マヤ南部にも蛇のモチーフが見られるようになる。とくにサンタ・ルシア・コツマルワパ（Santa Lucia Cotzmalhuapa）地域の石彫には蛇や異質な文字が刻まれている。そこでは加えてメキシコ湾岸文化の一大特徴である「ユーゴ・アチャ・パルマ」と呼ばれる彫刻が伴う。

ウシュマル遺跡の近くのムル・チック（Mul Chic）遺跡で見つかった壁画には、セイバル遺跡の彫刻に表現される蛇を身につけた人物とよく似た表現の人物群が他の集団を攻撃し処刑する場面が描かれている。

こうした特徴はやがてチチェン・イツァに集約されていくのであるが、いったい何が起こったのか。誰がこうした文化を誕生させたのか。

そこで、問題解決にはどうしても、メキシコ高原の動きと連動させてみていくことと、マヤ地域の文献史料の記述を考古学と対比させていくことが求められるのである。

[オルメカ・シカンカ・ノノワルカ]

ブウクだけでなくマヤ低地の諸都市が10世紀に放棄された最も大きな原因は、羽毛の蛇神に象徴される新しい勢力の存在である。

羽毛の蛇神に関わる歴史的事件、「テオティワカンの滅亡とトルテカの時代」については、すでに詳細に分析し紹介しているので（大井、1985）それを簡単に要約しておくことにとどめる。

羽毛の蛇神そのものは古く、紀元前1000年頃はじめまる最初の文明オルメカの時代に蛇・鳥・ジャガー・人が様々な組合せによって宗教芸術に表現されたなかで、蛇・鳥の組合せが羽毛の蛇
の起源である。しかし、一時代の権力の象徴としての羽毛の蛇神が誕生したのは紀元7～8世紀のことで、数百年間メソアメリカに君臨したテオティワカンの滅亡時のことであった。のちにメキシコ高原でケッサルコアトルと呼ばれる神である。誕生の舞台は神話伝説で語り伝えられたタモアンチャン（Tamoanchan）であった。タモアンチャンはマヤ系言語で「羽毛の蛇の地」を意味し、現在のモレーロス州にあるショチョカルコ（Xochicalco）遺跡に固定された。

タモアンチャン＝ショチョカルコには各地から異なった言語を話す人々が集まり、金星神の属性をもつケッサルコアトル神をもって至高神とした後テオティワカンへ移動する。テオティワカンでは新たな法を定め、集まった各集団それぞれの王を任命する。そしてそれぞれの言語を話す集団毎にテオティワカンを去って各地へ散っていた。と史料は語り伝えている。

諸史料をつき合わせていくことで、テオティワカンという巨大な統一勢力の滅亡がメソアメリカ全域を巻き込んだ事件であったことが浮かび上がってくる。また、権力の伝代に際し、新しい権力によって地方支配権を保証されない限り、既得の権力を存続させることはできず滅びるしかなかったという状況も推察できる。つまりメソアメリカは、政治経済的に独立した地域が個別に歴史を刻んでいたのではなく、ひとつの政治経済圈を形成していたことを前提に考えなければ、地方での変化を理解することはむずかしいのである。

こうした視点をもって、テオティワカン滅亡からはじまる時代をみていくと、メキシコ高原の歴史に参加した集団のなかでマヤ地域の変動に関わった可能性のある集団に、オルメカ・ウィストン、シカランカ、ノノワルカの名が挙げられる。さらにこれら三集団のうち、今回の踏査で最も注目したのがノノワルカ人であった。

ノノワルカがメキシコ高原の史料に現れるのは、イダルゴ州トゥーラの滅亡に関係してである。そこで「ノノワルカ・チチメカ」と、チチメカ集団と合体したかたちで述べられる。しかし、それは侵入民チチメカの、他人の土地に入ったときその地名をナワ語に翻訳し、更にその翻訳地名を集団名に取り込むという習慣に基づいているのであって、もともとノノワルカと呼ばれた人々がこのトゥーラにいたことを示しているのである。

ノノワルカがマヤ地域の史料に現れる例として、グァテマラのマヤ・カクチャケル人の『カクチャケル年代記』の記述がある。

「西方のトゥラン」にいたカクチャケル人は、「東方で戦いが起こっている。スイバと呼ばれるところで、汝たちはそこへ行き、汝たに授ける弓と楯を試みよ……」と何者かに命じられてスイバへ向かう。まずオルマン（原文ではオロマン。『ゴムのくに』の意。この住民はオルメカ人）において「作戦会議が開かれ、ノノワルカ・シェルピティ人を敵として戦うことを決めた。そして海辺で血濡れ戦闘が行われ、ノノワルカ・シェルピティたちは敗走した。その後ノノワルカ人の舟で東へ向かい、すぐにスイバに到着した……」（"Anales de los Cakchiqueles", 1950, pp. 59-61）と述べている。

位置関係からいえば、西からオルマン、ノノワルカ・シェルピティ人の住むところ、スイバの順に並んでいることになる。
次にユカタンの史料である『チラム・バラムの書』のなかの歴史記述をパレラ・バスケが整理した「マティチュ年代記（Crónica Matichu）」には、「これが、彼らの土地、彼らの故郷ノノワルを出てからのカトゥンの時の経過である：4カトゥンの間（849年－928年）、トゥトゥル・シウたちはスユア（スイバ）の西にいた。かれらはトゥラバン・チコナウトランから来たのであった……」（El libro de los libros de Chilam Balam, 1985, pp. 35-36）という記述がみつかる。この一文を掘り下げてみると、トゥトゥル・シウと呼ばれる人たちはノノワル、すなわちノノワルカ人の地を故郷とし、その故郷を離れてトゥラバン・チコナウトランという場所に居たが、そこを発ってスユア（スイバ）の西に約80年間とどまった、ということになる。文脈から、または『カクチケル年代記』の記述から、スユアの西は故郷ノノワルということは明らかであり、トゥトゥル・シウたちはトゥラバン・チコナウトランへ行き、そののち故郷へ戻ったと解釈できる。また、二つの史料を並べたときトゥトゥル・シウはノノワルの住民すなわちノノワルカ人であり、カクチケル人たちと戦ったノノワルカ・シュルビティ人でもあるとすることができる。

トゥラバン・チコナウトランについては、テオティワカンである可能性が高い。その根拠としてペルナルディーノ・デ・サアッグンの『ヌエバ・エスパーニャ物産全史』（Sahagán, 1699）にテオティワカンは「チコナウトラとオトゥンパの間」にあると記していることが挙げられる。トゥトゥル・シウ＝ノノワルカ人がテオティワカン滅亡と新権力の体制確立時にメキシコ高原にいたと考えても不自然ではない。

さてトゥトゥル・シウ＝ノノワルカ人はスユアの西＝ノノワルの地を発ち、1008年にはアフ・メカット・トゥトゥル・シウという人物に率いられてチャカナビトン（Chacnabítón）に到着（侵入）したという。ピニャ・チャン先生は、亡くなる少し前にチャカナビトンはチェーン・イツァのことだと推定した。フアン・ピオ・ペレスの記述に、ユカタンに着いた16世紀のスペイン人たちは、「この土地はマヤパンと呼ばれていた。そしてそれよりもずっと前にはチャカナビトン（チャカナビトン）」と呼ばれていたと記していることに根拠を求めている。マヤパンという統一勢力の拠点名がユカタンと呼ばれる前の地域名ならば、マヤバンの前の一統一勢力の拠点であったチェーン・イツァがチャカナビトンだとすることができる、としている。

つまり、トゥトゥル・シウ＝ノノワルカ人は1008年にチェーン・イツァに入ったことになるのである。

因みに、この集団のもうひとつの流れは、アフ・スイトク・トゥトゥル・シウという首長に率いられて、カトゥン2アハウの時（987年－1007年）にウシュマルに居を定めたという（Ibid., p.39）。

こうした記述を並べていくと、トゥトゥル・シウ＝ノノワルカ人は元来マヤ地域に故郷（ノノワルまたはノノワルコ）をもつマヤ系の集団で、メキシコ高原におけるテオティワカン滅亡と権力交代という歴史的変動に参加することが浮かび上がる。彼らは、新しい体制の核となる羽毛の蛇神を持って故郷へ帰り、そこからユカタンへ移動したのでである。ユカタンへ羽毛の蛇神体制をもたらした集団の一つであった。もうひとつ重要な点は、トゥーラにノノワルカ人が居たことで
ある（*Historia Tolteca-Chichimeca*, 1976)。

チチェン・イツァ遺跡とトゥーラ遺跡に同じ様式の建築や彫刻などの美術があり、二つの遺跡が発掘されて以来どちらが先かの議論が続いている。また定説化しているヒメネス・モレーノ説は「トゥーラに都を置くトルテカ帝国」が先だとするもので、いわゆるマヤ・トルテカ文化のトルテカ文化は全てこの説によって解釈されてきた。しかし、この説が恣意的な史料解釈によるもので、本来のトルテカ文化はずいぶん違ったものであることを論じてきた（大井, 1985, 2000, 2002）。

その詳細は省くが、の上のように解釈することで、ノワルク人がチチェン・イツァの建築美術をもってトゥーラの建設を主導したとすることが、メキシコ高原とマヤ地域の間の一連の動きに関わったことが見えてくる。

なお最初に述べた言語学者オットー・シューマン氏の質問に対する答もここにある。ユカタン・マヤ語がメキシコ高原のオトミ語と深い関係をもったのは、ノワルク人などによるこうした一連の動きがあった古典期後期においてであった。もちろんここで新たな問題が生じる。それは、メキシコ高原の古典期文明の担い手がオトミ系民族だったのか、ということであり、これこそ追究し続けている問題である。

この問題を解く鍵は、ナワ語を母語とする集団の歴史的位置づけだと考えてきた。そして、考古学的データと文献史料の対比によって、ナワ集団すなわちチチremaを称する諸集団（以下混乱を避けるため「ナワ・チチrema」と造語する）は、これまで漠然とあるいは「トゥーラに都を置くトルテカ帝国」説に基づいて、テオティワカンの時代からメキシコ高原で活動していた、とすると見解を否定できた。簡単に言えば、ナワ・チチrema諸集団がメキシコ高原に浸入したのは11世紀半ばのことである。少なくとも彼ら自身の記録にはそれ以前メキシコ高原で活動したとは記していない。そして、すでに述べたことだが、ナワ・チチrema諸集団は、先住の人々が名付けた地名や集団名などをナワ語に翻訳して自分たちの歴史の中に組み込んだ。それが後世の史家を混乱させた原因であった。こうして見ていくと、メキシコ高原の先住民族が少なくともナワ・チチremaではなく、もっとも可能性が高い、あるいは他に候補がないという集団がオトミ系民族である。

しかし、そこで組み立てた枠組みにどうしても取まらなかったことが、トゥトゥル・シウの動きであった。トゥトゥル・シウという名は「青い鳥」を意味するナワ語であり、ナワ・チチrema集団が9世紀にすでにマヤ地域で活動していたとすれば、枠組みの見直しが必要になる。ところが今回の踏查で、トゥトゥル・シウはノワルク人であると確信したこと、現在も政治活動などでさまざまな話を聞いたシウ一族の存在から、この問題を解く突破口が見えたと感じた。

『チラムパラムの書』のトゥトゥル・シウとランダが記したトゥトゥル・シウは同一の集団と思い込んでいたが、そこに問題が隠されていると考えている。二つの可能性がある。一つは、トゥトゥル・シウがトゥトゥル・シウの歴史を自分たちのものとした、つまり他集団であるトゥトゥル・シウの歴史を奪ってトゥトゥル・シウの歴史とした可能性である。しかし、この場合二集団の接点がど
ことにあったのか説明できない。もう一つは、トゥトゥル・シウ＝ノノワルカと混じり合ったチチメカ集団がトゥトゥ・シウであった可能性である。この場合、接点としてはトゥーラまたはタバースコ州のノノワルカの故郷が可能な地である。

この問題については、トゥトゥ・シウと関係のあるマヤパン遺跡を歩きながら考え続けた。

【マヤパンとチチメカとシウ】

マヤパン遺跡を訪れたのは今回がはじめてであった。マヤパンについてランダは、クルゥカンを名乗る人物がチェン・イツァに似せた都市を建設した、と記している（Landa, op. cit. pp. 12–13）。また、チェン・イツァとウシェマルとマヤパンの間に三都市同盟が結ばれていたとする説があるが、史料にはっきり書かれているわけではないと知られている（大越翼氏より指摘される）。マヤパン遺跡の写真を見ると、ブクク様式の典型であるチャク神像のモザイク装飾があり、ブクク文化期にはすでにマヤパンは存在していたものと理解していたので、三都市同盟があってもおそらくないと単純に考えていた。

結局、遺跡を見てそれが誤解であったことが明らかになった。チャク神像はブク文化のそれによく似ているがどこか異なっていること、どの建造物をみてもチェン・イツァをコピーしようとした努力のあたははあるが、全体も細部も粗製の感は否めない。見た範囲では、チェン・イツァと共存したとするのは大いに無理があると考えた。

『チラムパラムの書』によれば、1194年、チェン・イツァはマヤパンのフナック・ケールによって征服されたという。その時のチェン・イツァの攻撃者として7人のマヤパン人が挙げられているが、全員がナワ語の名前をもっていた（El libro de los libros de Chilam Balam, 1985, pp. 39–40）。そこからナワ・チチメカ人が軍事力をもってユカタンに入るのは12世紀末ともすることができ、さらにマヤパンの実質的な支配集団であったと推定できるのである。

この点をランダは、ココム一族がタバースコにいたメキシコ人（ナワ・チチメカ人）を傭兵としてマヤパンに迎え入れ、強権を振るったと述べている。また、その時マヤパンはナワ・チチメカ人のもつ弓矢におびえたが、やがて習得し恐怖になくなったとも記している（Landa, op. cit., p. 16）。

この部分の記述で興味深いのは、シウ人が情報提供者だったと推理できることである。シウたちは、ココム一族とナワ・チチメカ人の圧政に同調しなかったという。シウもその出自は明らかにしていないものの、土着のマヤ人ではなく余所から移住してきたとしている。と同時に、ランダに対して集団名をトゥトゥル（ル）・シウだと伝えている。では何故、『チラムパラムの書』に記されているトゥトゥル・シウの歴史をランダに話さなかったのであろうか。もし彼らシウが本当にトゥトゥル・シウ＝ノノワルカならば、その方がはるかに自分たちを飾ることができたはずです。

ともあれ、シウィにまつわるこうした疑問は解決しなければならない。
ユカタン調査で歩き観察し考え議論してきた事々の一部をフィールドノートから抜き出してきた。歩いていれば疑問にふつうくなり新しい発見を目にする。遺跡の発掘調査とはまた違った味が楽しめるのである。

予定にはなかったが、考古学者エンリケ・テロネス氏の招待がありキントナ・ロー州のカンクンを訪れた。魅力を感じたのは、彼が調査した養蜂の遺跡とチャクモール像が出土したチャクモール遺跡の話を聞くことができ、出土遺物を見せてもらえるとのことだったからであった。チャクモール像が出土している遺跡は、ユカタン半島ではその起源の地チチェン・イツァのみであったが、キントナ・ロー州の海岸にあるチャクモール遺跡でみつかったという。

彼の話と出土遺物についてまとめてみると、まず、チャクモール像は小神殿内の床につくられた漆喰製で原位置にあるという。写真を見たがチチェン・イツァ遺跡のチャクモール像にはまったく似ていない。次に出土遺物を見ると、黒曜石製の弓矢用の鏃が数十点、黒曜石を磨いて作った装身具の破片、鋼製の鉄などで、私がチチメカ文化の指標としている遺物の組み合わせである。キントナ・ロー州の海岸には後古典期の遺跡が列を成しているという。ナハ・チチメカ集団のなかには、メキシコ湾岸ルートではなく、太平洋岸ルートでグァテマラやエル・サルバドルやホンジュラスに定着したり、さらに先へ進んだりした人たちがいたことは把握していたが、ユカタン
半島のカリブ海岸で活動していたナワ・チチメカ人については考えていなかった。カリブ海岸は、1975年に故ビニャ・チャン先生と半月ほど踏査したが、改めて歩く必要がある、とくに水上の道を追ってみたいと思った。

注

1. sak be, ユカタン・マヤ語で街道、舗装道路（Diccionario Maya, 1991）。  
3. Cau cel. メリダの西北にある村。  
4. タルー・タブレロックは、タルー直ち傾斜した壁を枠付き垂直壁タブレロックを組み合わせた壁型のことを使う。  
5. ひうちし、pedernal, silex。ナワトル語でテクバトルテクパトル。  
6. メソアメリカでは祭祀暦と太陽暦の組合せによって52年を一周期とする暦が使われた。年の名称は、1から13までの数と20の事物の名のうち4つの名と組合わされることから、それらのそれぞれの名、彫刻・塗石の家をもって年の担い手と呼ばれる。  
7. ユーゴは「くびき」の意で、くびきの形であるU字形の石彫、アチャは「斧」の意で、板状の石彫、バルマは「シュロ」の意で、シュロの葉をイメージさせる石彫。  
8. “Anales de los Cakchiquenses”または“Memorial de Sololá”または“Anales de Xahl”の三つのタイトルがあるが、ここでは一番目の「カクチケル年代記」を使う。

参考文献

“Anales de los Cakchiques”  
1950 en Memorial de Sololá, Anales de los Cakchiques, Título de los Señores de Totonicapán, edición de Adrián Recinos, Fondo de Cultura Económica, México- Buenos Aires.

Códice de Calkini  
1957 Biblioteca Campechana, México.

Diccionario Maya, Maya-Español, Español-Maya  
1991 (Director: Alfredo Barrera Vásquez), Editorial Porrúa, México.

Echazarreta González, C. et al.  
2002 Apicultura en Mesoamérica, Universidad Autónoma de Yucatán, México.

Historia Tolteca-Chichimeca  
1976 INAH-SEP, México.

Landa, Diego de  
1973 Relación de las cosas de Yucatán, Editorial Porrúa, México.


Libro de los Libros de Chilam Balam, El
1985 Fondo de Cultura Económica, México.

Maldonado C., Rubén

Mediz Bolio, Antonio
1941 Chilam Balam de Chumayel, Biblioteca del Estudiante Universitario, UNAM, México.

Misión Arqueológica de España en México

Okoshi H., Tsubasa

Oviedo y Valdés, G. Fernández de
1851-55 Historia General y Natural de las Indias, Islas y Tierra Firme del Mar Océano, 4vols. Madrid.

Quezada, Sergio
2001 Breve historia de Yucatán, Fondo de Cultura Económica y Colegio de México, México.

Relaciones Histórico-Geográficas de la Gobernación de Yucatán
1983 Universidad Nacional Autónoma de México, México.

Sahagún, Bernardino de
1969 Historia General de las Cosas de Nueva España, Editorial Porrua, México.

Swadesh, Mauricio

Terrones G., Enrique

Villa Rojas, Alfonso
1945 The Maya of East Central Quintana Roo, Carnegie Institution of Washington, Pub. 559, Washington, D.C.

大井邦明
1985 『消された歴史を揭る——メキシコ古代史の再構成——』, 平凡社
2000 「トラン群の破壊者チチメカとピピルの移動」, 『チャルチュアバ——エル・サルバドル総合学術調査報告書——』 pp. 424-438, 京都外国語大学
2002  「テオテナンゴとマトラツィンカ — オトミ古代学 1 —」, 『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No. 1, pp. 13-50. 京都外国語大学